

備陽史探訪

第53号
発行
備陽史探訪の会
福山市多治米町5-19-8
TEL(0849)53-6157

”古墳めぐりに思う” —第一〇回親と子の古墳めぐりに向けて—

会長 田口 義之

本会恒例の”親と子の古墳めぐり”は本年で一〇回目の記念すべき年を迎えました。

一口に十回と申ししましても幾多の試練を乗り越えて来ただけに感慨深いものがあります。

この企画の発案者は誰であったのか、もう思い出せませんが、第一回の親と子の古墳めぐりが大成功を収め、以後会の恒例行事として市民にも定着したのは、神谷名誉会長、山口副会長を始め多くの会員の情熱のためものです。

今でも強烈に思い出されますが、初回の古墳めぐりが無事終了して、”養老の滝”で打ち上げを行なった際、テレビのニュースで古墳めぐりが紹介された時は、全員でバンザイを斉唱したものです。

この古墳めぐりも一時危機を迎えた時もありました。確か三回目ぐらの時だと思えますが、参加者が少なく、おまけに午後雨となつて”もうやめようではないか”の声があがったこともありました。

しかし、この危機も、新たな強力なリーダーとして篠原さんが現われ、今回の記念すべき年を迎えることになったのです。

中には劇的な古墳めぐりもありました。

一昨年の古墳めぐり(八回目)は服部から二子塚のコースでしたが、朝方まで豪雨が続き、直前まで決行か中止かで大いに迷い、思い切つて決行すると、現地に着する頃には雨が止み、歩き出すと見る見る雲がとぎれ、最後には篠原さんの”さあ

入りましょう”の掛声で初めて二子塚の石室に入り、大好評の内に終えることが出来たということもありました。

今回は十回目ということで色々な新しい企画をたてております。

古墳めぐり初めての貸切バスによる探訪、午後のスライド(或は映画、講演会という案もあります)上映会、又、この十年を振り返つたパネル展示会、記念誌「福山の古墳」(仮称)の発刊も検討中です。

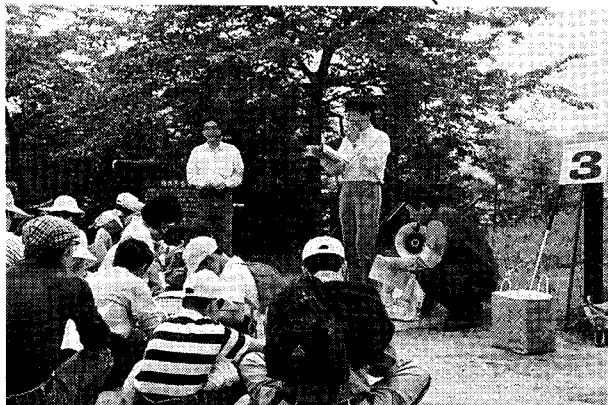
もちろん、今回の企画も、今後の

古墳めぐりの存続も、その成功は一人皆さんの協力いかんにかかっています。

是非、一人でも多くの方々に御参加いただき全員で成功に導きたいと思ひます。

(十年の歩み)

- 第一回親と子の古墳めぐり (S 58・5・5) 駅家町服部大池周辺 参加一二六名
- 第二回 (S 59・5・5) 赤坂町方面 参加二〇二名
- 第三回 (S 60・5・5) 神辺、加茂方面 参加六九名
- 第四回 (S 61・5・5) 神辺町御領方面 参加五三名
- 第五回 (S 62・5・5) 服部大池周辺 参加七二名
- 第六回 (S 63・5・5) 赤坂町方面 参加一〇三名
- 第七回 (H 1・5・5) 加茂、駅家町方面 参加一一二名
- 第八回 (H 2・5・5) 服部大池周辺 参加一〇三名
- 第九回 (H 3・5・5) 神辺、加茂方面 参加六八名
- 第十回親と子の古墳めぐり(平成四年五月五日実施予定)



第7回親と子の古墳めぐりのスナップ (猪子古墳にて)

神石郡の古代郷 特に神石郷について

出内 博都

過疎の代表地のような神石郡も古代においては四郷をもつ普通の郡であつたようである。

神石郡がいつ設定されたかについては普通、日本書紀（六七年）天武二年三月十七の条に「備後国司、白雉を亀石郡に獲て貢れり、乃当郡の課役悉に免さる」とみえるのを最初とするが、吉備国が備前、備中、備後と分割独立するのはもう少し後の様であるが、七世紀末には一応郡として成立していたと思われる。（広島県史）

宝亀五年三月十二日の勘籍に（正倉院文書）「備後国神石郡志麻郷戸主物部水海」とありこれ以後神石郡を用いている。和名抄には「神石」と記し、「加女志」と訓じている。それに含まれる郷として、神石・志・高市（訓不明）三坂（訓不明）の四郷をあげているが、志は前記の勘籍などからみて「志麻」とみてよい。この四郷が現在のどの地方に当るかについては諸説があつて一定しないが、多くの説が神石郷が現三和町亀石を中心とした地方であり、高市郷

が現神石町高光を中心とした地方であり、志麻郷は後世に志麻里庄といわれた三和町一帯をさし、三坂郷は現東城町三坂（元神石郡内）や油木町、豊松村などをさすといわれている。このうちで神石郷が三和町亀石附近というのは全く成立しない。神石郡の境域内に四郷設定するうち志麻郷を現在の三和町の大部分とする、中心となる小畷集落と亀石集落は隣集落で亀石は後世の志麻里七郷の中へ完全に入ってしまった、いわゆるドーナツ型の郷設定になる。亀石という字に感わされた結果と思われるが、亀石という地名はごく一般的で全国的にはかなりある地名と思えるのでこれを根拠にすべきではないと思う。神石郷を考える場合、「水野記」（瑞源院本）の項に現神石町福永について「門田庄郡村、南光山向陽庵、禪宗（中略）八幡宮古社領拾六貫、天文六丁酉年宮野高雄修補（中略）神石大明神、古社領拾貫、毛利家没収之、門田庄門田村西深山政蓮寺禪宗（中略）梶尾大明神、自雲州大社奉勸請也、天文十七戌申年宮野高尾再興（中略）社領式拾貫（中略）門田庄和泉村八幡宮、天文三乙未年宮野高雄再興（中略）中谷寺、真言宗、古大内某之建立、寺領拾貫（中

略）右郡村・門田村・和泉村是謂三村、又号福永村、皆福永村之内也」とみえる。これによれば福永村は門田庄という庄園であつた（領家不明）ことが知れる。庄官の一種であつた「公文」の存在を示す地名として大久保谷に「久もんきう」という地名も残っている（現殿敷地区町宮住宅南附近）元禄十三年の検地帳によれば郡村は小堀谷、和泉村は泉谷として存在し、その他に小堀山（八幡神社鎮座）泉山（城跡あり）などが知られる。神石大明神は現在のところ不明であるがおそらく近代に入つて小堀山八幡社に合祀された三十数社のなかに埋もれたものと思われる。神石郡の郡衙があつた処が郡村（こおり村（古堀谷））として残つたものである（この例は全国的な現象である）神石という地名をさぐる手がかりが古堀山八幡神社のある地域「岩石」という地名の中にあると思

る。この場合「神」とは岩の意にはかならない。（松尾俊郎「地形地名の知識」という地名の転化論（巨石崇拜などの自然信仰が基盤にある）から岩は神であるとすれば岩石という集落名は明らかに「神石」になるはずである。然もそこが郡家の有在を示す郡村（小堀山八幡社）にあるとすれば神石郷はこの附近、即ち現神石町に比定すべきである。

2. 岩は齋の転化ではないか、齋うには神聖なるものとして祀る、神としてあがめるなどの意があり、神石が「齋る石」「齋う石」などの変化を経て音のみ伝わり岩石に転化したことも考えられる。

3. 盤座、岩座から転化して神が岩になつたのではないか、盤座は神のいらつしやる処という意味であり、この「いわ」は神を意味しているから、神が岩にかわることも考えられる。

以上の様に平地にある「岩石」という地名は本来の「神石」という地名の転化とみてよい。神石町一帯は古代の帝釈遺跡に連なり、更には大和政権の前進基地として、既に四世紀には全長七十五メートルという備後随一の前方後円墳である「辰ノ口古墳」が築造され以後現在判明し

ているものだけでも町内で百基に近い古墳があり、この面では質量ともに圧倒的に他地区に卓越している。七世紀に固定していく律令体制の中で郡の中核をなす地域としての条件をもっていたといえよう。

従来よくいわれている高光が高市郷の名残だということは全く論外の事と思う。高光というのは明らかに十世紀なかば頃から出てくる律令制の人頭税体制にかわる土地税制として田堵・名主体制の名田の名残といえよう。福永(福長)もこうした名田系の名称である。包轄的な福長名が荘園化して門田荘(領家不明)となり、その中へ門田、和泉、郡(古廻)などの具体的な生活圏としての自然村落が形成され、荘園消滅期にもとの名田地名である福長(永)が復活したのではないだろうか。

神石郡内の他の三郷のうち境域や範囲は別として、志麻郷の三和町地方、三坂郷の東城町三坂、油木町新免地方(或いは永野地域は含まれるかも?)はほぼ間違いないと思える。

残る高市郷は豊松地域を中心として一部油木町に及ぶ地域を設定できるのではなからうか、神石郡の境域が近世封建体制のように固定するのは少くとも和名抄のできる十世紀頃

ではないだろうかと思える。平城京跡から出土した木簡の中に神石郡加茂郷というのがあり、安那郡大家郷を現三和町大矢に比定する説があり、更に現油木町小野地区の東城川に面する西方の谷に後谷とか隠殿などの地名を残す処をみると小野地区が備中町方面から開け一時期備中圏に属していたのではないかなど、未解決な課題が多く古代郷は極めて流動的であったと思う。こうした現実の中で神石町の辰ノ口古墳、神石大明神、郡村などは神石郡の古代郷の歴史を探る原点の一つといえよう。

讃岐の探訪、神の谷

小島 装巻春

五色台白峰の、ふつくらとなだらかな稜線が、滑べる様に下がって、南側の膝を立てた如くそば立つ五夜ヶ岳との間に、アッケラカンと明かす谷間を形作る。その、さ、やかかな流れを伴った谷が西北に向って開け始めた辺りに、式内社、神谷神社が鎮座して居た。

主祭神は火結命、あの迦具智神の事であり、又秋葉大明神と呼ばれ、三宝荒神の主祭神でもある、次位は

奥津彦命と奥津姫命の相偶へる神、備後の辺りでは、荒神様と恐れ祀られる神である。いずれも火と水の性を合せ持つ荒ぶる神々なのである。これはどうした事だ、明かるく集げなこの谷間は、恐ろしき神々の集う場所でもあった。

一般に現代の我々は「神様」とは氏神様や鎮守様に代表される如く、一族や村人を守って下さる存在、と考へるが、古代においては、神は人々に災いをもたらし、祟る存在なのであった。その事は書紀を一読すれば良く分る、人々はこの災いを逃れる為にこそ、神を祭り神撰を捧げ、神の怒りを静めようと努力を重ねたのであった。神谷の荒神様達は、どの様な災いをもたらしたのであろうか。

常陸国風土記に、夜刀の神の記事がある。人々の長、麻多智は開墾の邪魔をする神々を、甲冑を着、武器を持って山に追い上げ、山口に標の梳を立て「これより上を神の地となす、下は人の地である(出て来るな)」と宣言した、とある。「延喜式祝詞集」の中に「遷神崇神」と云う祝詞がある。「荒び給い健び給う事なく(中略)神直び大直びに直し給いてこの地よりは四方を見はるかす山川の清き地に遷り出まして我が地と領

きませ」(梅原猛著、神々の流ざんより)近世では全く忘れられて、本居宣長でさえ使用目的不明、とした(同書)この祝詞だが、神籬など臨時の祭祀から社殿を造って神を祀ると云う変化が一般化された頃に、この祝詞は大いに活用された、と私は考えて居る。

神谷の荒神様達にもこれは当てはまるのであろう、「旱水害、病虫害、人々の病を起す荒ぶる神々よ、(明かるく見晴良い)この谷は神の地です。この地より出て来ますな、その代り祭を絶やさず御仕え致します」、古代人の祈りが聞こえて来る様でもあった。

弘仁三年(八一二年)嵯峨天皇の御代、弘法大師の叔父、阿刀大足が始めて社殿を造り、春日四神を相殿に勧請した、と旅行の資料にあった、藤原氏の勢力の浸透ぶりが察せられる伝承でもある。

棟札によって建保七年(一二一九年)建立と由緒の分かる、国宝の三間社流造りの本殿は素朴で質素ながら、椀皮葺き屋根全体が大きく反って向拝を形造り、やりがんな仕上げの柱と共に古式を残して、荘重さの中に優美でもあった。

本殿から十米程前にある拝殿は、後

年の建築ながら、これも古式を伝えて床はなく、拜所と云った感じの建物である、その脇の戸を開け、我々を神域に導き入れて御説明されたのは、美しく愛嬌豊かな、官司の奥様であった、私しが一番興味を引かれたのは御神像七体の内、奥津姫命のみ石像で他は木像との事だ、奥津姫は必ず奥津彦と組んで祀られる神なので、これは不思議である。

「本来は姫が主祭神ではないですか」と質問すると、奥様が屋根を指差した、千木の外側が削られて男神の印なのであった。

宝物殿で重文の数々を見学し、谷を上って磐座などを拝して神社前に戻って来たら片隅に層塔らしい石が苔むして積んであった、オヤと思つて近くに居た官司の奥様に聞くと、

「向うに神宮寺があつたので、その頃の遺物だと思います」と云つて指を差した、その方向を見ると立派な瓦屋根の御殿が見える、思わず「あれですか?」と云つたら、奥様は婉然とほゝえんで「まああれは私共の住いのですよ、神宮寺跡はもつと先です。」と云つた、その瞬間、私は

先程の疑問が氷解したのである、何故奥津姫の像のみ石であるのか。前出の三神の外後で合祀された春日

讃岐路

KK 生

四神とは、天児屋命、武みか槌神、ふつ主神、姫大神だが姫大神は最年長だが独身である。若い奥津姫には夫がある……他は全部男神。……私しはふと思ひ付いて、姫神に写真を撮らせて下さいと頼みカメラを構えたら、後から「私しが撮つてあげるから並びなさいよ」と声がする、振り返ると探訪会員の姫神が、私し的心根を見透かした様にはゝえんで居た。私しはこう云う場面に弱い、クシャクシャ顔になるのである、さてシャッターを押して頂いて御礼を云つて居ると、又後から「僕も」と声

がした、見ると探訪会員の苦み走つた美男の神が姫神に寄りそつてVサインを出して居る、嫉妬深い私しは「フィルム切れです」と云おうとしたが、二人の姫神様がにこやかに見守つて居たので、思い直して一枚撮つてやつた。

神谷では姫神様はモチモチなのである、夫のある女神は石にならざるを得ないではないか、そしてその事を姫神様達は皆知つて居たに違いない。

一九九二年一月

善通寺市の古墳、弘法大師が御生れになつた所、四国御遍路の札所をそのまゝ市の名称とした、善通寺市は、門前町だと計り思つて居たが、聞くところは大違い、自衛隊基地と云う峻めしい街でもあつた。

だが驚く程の事ではないかも知れない、この辺りは古代、大豪族が住み付いて、その収益を維持拡張するため、盛んに軍備を増強し、強兵専一にした土地柄と考えられない事もない……。

資料によれば、この付近は弥生の遺跡が広範囲に検出され、石器、土器は数知れず、銅鏃、銅剣、家型埴輪、弥生の墳墓から、下つては初期から後期の古墳が、市の付近にびっしりと密集して、備後地方には数少ない前方後円墳が、これも初期から後期まで、同市内丈で十基余りもずらりと並ぶ。この連続が果して同一族の系統を物語るものかどうかは分らない。それ程の調査は進んで居ないと云う事もあるが……。

前方後円墳で、昭和五十七年に実施され意外な程の遺物が発見された。土器や装飾品や金銅製冠帽などを始め武器、馬具、刀剣等この豊かな平野を制圧する為の道具はすべて整つて居るのである。

さて見学出来た古墳の一つ、その王墓山古墳は復現工事が進行途中であつたが、全長四十六米、後円 高さ六米と、谷相平野の真中に小山の様に存在して居た、以前はみかん畑との事で、盗掘のうわさもあつた様だが、何処からも見える所でまあやりにくかつたのであろう、遺物も内容も前出の様に王墓にふさわしく、特に玄室内の石屋形が出雲地方と九州肥後地方の特長を兼ね備えて居るとの見解に興味を引かれたのであつた。もう一つは宮ヶ尾古墳で昭和四十一年、残土の整理中、天井石がブルトナーに引掛つて発見されたそうだが、現状は広いほゞ平坦なみかん畑の真中で地下数米、一見地下式墓の如くであるが、盗掘されて居た事から、信じ難い様だが墳丘ごと、人知れず埋没されたらしいとの事である。まあそれはとも角、目玉は奥壁及び側壁に克明に線刻された、船団、武人、騎馬等の画像なのであろう、内容の充実したこの線刻は、古墳の主

及び当時の武装集団の役割を、直接今日の我々に伝えて呉れる生々しい資料なのでもあった。

まだまだ調査はこれから、と云う普通寺市の古墳群であるが、強い興味を引かれるのは犬麻山にあるという野田院前方後円墳である。全長四六米のこの古墳は、四世紀前半の築造とされるが後円部が積石で構成され、朝鮮高句麗の系統に近く又付近積石塚の原点とも云われ、坂出を経て高松石清尾山に連鎖するとも云う、何ともタメ息の出る様な善通寺なのであった。それにしても石清尾古墳群、見学しなかったな……。

丸亀城跡、「海をへだてる」、この言葉に云いつくせない深く広い意味がある。本州に住む者は「フェリー」や連絡船があれば同じだろう、と軽く考えるが、これは物質的な面での事であって、精神面を無視した、暴言であった。

その証拠の一つが丸亀城である。わずかに五万石の領地にあれ丈の城を造る、又その城の（あえて跡とは言わない）建物こそ少ないが、内堀と内郭をそっくり現代に残す、そう云う努力をした人が居て、それを受入れる文化があった。

標高六十六米、本丸、二丸、三丸及

び下の郭と小山の四面を三、四重の石垣で巻上げ、麓は又三、四十米の堀が四面をめぐる。東面は大木が繁って良く見えないが、南又は西から見ると、山全体が巨大な塔の様に見える所が不思議であった。石垣の積み方も野面積から切石積まで興味はつきないであろう、私は以前備中津山城や九州熊本城の石垣にも嘆声を発したのであったが。……丸亀城は又格別であった、石垣の美日本一と丸亀市は誇るがそれが海のこちらに、ストレートに伝わっては居ないのである。瀬戸大橋がかゝらなければ、備陽史探訪会員でなければ私は一生丸亀には行かなかつた、と思う。

だがその丸亀城でたった一ヶ所私しが良く知って居る場所があつた。絶対に見逃せない所である。それは会報X号で、Sさんが教えてくれた所、井戸なのである。私は本丸を隅々まで探したが見つからない、一足早く降り始めて、二丸の妙な方形構造物の前を横切って行くと、東屋風の屋根が見えた、看板もあるので近くとまきその井戸であつた。

直径二米程、深さ六十米とあつた、良くも堀つたものだが、この城の生命線とあらば、やらずばなるまい。……だが私が感心したのはこの井

戸の中を探検した人の事である。もう一人はそれをやらせた人の事である。私しがもし、小説を書くとしたら、この二人は結ばねばならない。……Sさんは井戸に青春を預けてあつた、と云つて居るのだが。

一九九二年一月

「一年過ぎました」

赤松 雅子

入会させていただきまして一年が過ぎました。教科書に書かれた中央の歴史しか知らなかつた私ですが、今日で見ると身近かな歴史を色々教えていただいたその面白さに目覚めたところですよ。

足利直冬が新市にいたとか、藤原純友の名前は知っていましたがそれを滅亡させた人が恩賞に沼田七郷を与えられ楽音寺を中心に現在の本郷の文化の発展の基になり、源平合戦の勝敗により、頼朝の家来が関東からこの地に来て本郷三原の歴史を作り、遠い大和政権の蘇我氏の勢力が強力に働いて兵庫県の竜田山石蘇我ブラ

ンドの墓が備後、安芸の国境に多数あるとか、こんなに中央と私達の住む地方が政治に左右され直結している

たとは想像したことも有りませんでした。道を歩きながら皆様に色々基礎知識を教えていただき、皮相な勉強しかしていなかつた私の無知を反省しています。幼稚な質問にも何時もていねいに答えて下さつてありがとうございます。

さて話は変わります十二月一日の尾原川流域探訪は小春日和に恵まれ見栄えのする古墳めぐりで楽しかつたですね。

その中でも特に私が興味を持ったのは梅木平古墳です。石室と奥室合わせて長さ二十m以上、幅三m、高さ四・二mの石室空間にはびっくりしました。何でも石棺一つ入れるのに人間が五十人位はいれる程の広さが必要なのでしょう。山口さんは大きさは権力誇示の為と説明されましたが土の下に埋めて見えなくしてしまふのにも思いました。それでその活用を私が空想してみたのですが、吉備の国との勢力抗争中という事です。ですので単なる墓と見せかけて実は武器、食糧の秘密倉庫だった。又は入口を上手にカモフラージュしてVIPと腹心の部下の隠れ家だった。

当時の葬送の法令も人々の思想も知らない私は自由に推理して大へん

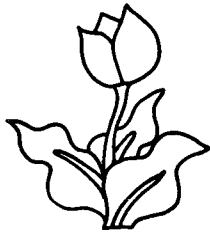
楽しく遊べました。
今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

平成三年十二月三日記

古城跡

武人の往来せる道か
帷子の音 風の音
額に汗して 山頂をめざす
行けども 行けども
頂上につけず 無言の列がつづく
頭上に鳴るわ 風の音ばかり
わずかに 光が見え
城跡らしき所につく
一段と 高い所が
城跡らしい ふっと一息
連なる山々の峰
心地よい風に吹かれて
武士とは かなしい者
追風に送られて 帰路につく

藤代 由子



激動の年の瀬に思う

種本 実

先日安土市では、安土城の築城四百年祭を行うにつき比叡山に協賛を呼びかけたところ、断わられたそうである。言うまでもなく、信長の焼き討ちが根因である。この蛮行では僧兵ばかりではなく、いくさとは無関係なまじめな僧侶と在俗の老若男女数千人を、家来の助命嘆願を無視して皆殺しにした。四百年という

星霜も被害者の怨念を霧消するには至らないほど、悲惨な行爲であったといえる。遠い中世の出来事が現代にも尾を引いているという事例は珍しくはないが、なにげなく聞いていたNHKのニュース解説の中で触れたこの報道は、中世と現代を表裏的に感じさせた事件であり感懐を受けた。

ところで平成三年は真珠湾から五十年、満州事変から六十年であり、十二月には太平洋戦争をめぐって日米の多彩な論調がマスコミを賑わした。戦後生まれでも、半世紀前の戦禍の実態は求めればいくらでも得ることが出来る。とはいえ、テレビ

ゲームに熱中するわが子を眺めつつ、戦争を知らない親として、本場の戦争をどう教えることができるかところもたない。新大陸発見以来、欧米列強が近代化された軍事力を背景に有色人種を好餌としてきた罪は不問とされ、日本だけが全世界に一億総懺悔するのは軽佻である。だが明治以降が国の進路が真珠湾へと向かった過程を検証し、過ちを俎上に載せなければ歴史からの貴重な教訓は得られないと思う。

一方、人類の歴史は戦争の歴史ともいえる。わが国では、稲作が始まった弥生時代から武器の製作が始まったといわれる。戦いが武器を生むのか、武器が血を欲するのか、今なお戦火が絶えない地上はやがて廃虚となる日も杞憂ではない。いまこそ人類の英智は軍拡から軍縮へ歩むべく、一人ひとりが後世に責任を負っているのではなからうか。

ところで、テレビやラジオでやたらにモーツァルトの名や曲を耳にすると思つたら、今年(平成三年)は彼の没後二百年だそうだ。いろんな意味で今年に記念すべき年だった。湾岸戦争、共産圏諸国の瓦解、宮沢新総理誕生、様々なニュースが飛び交う日々、新聞の見出しに目を奪わ

れつつも、記事を十分理解するには至らないうちに年の瀬を迎えた自分に、じくじたる思いがする。米の自由化、経済摩擦、PKO法案、脳死臨調、プロ野球のフリーエージェント制、学校の週五日制等々来々年への積み残しは多い。

「激動でない年はないのですから……精一杯やるだけです」十月、総理就任を真近にした宮沢氏の弁。待機構えている新たな激動に押し切られるように、師走はかけ足で去り、いま歴史のページがめくられようとしている。

十二月三十一日

第四十八回中世を読む会の御案内

城郭研究会主催

(テーマ)

「戦国武将の手紙を読む」

(時) 三月二十七日(金)午後七時

(所) 中央公民館2F和室

(会費) 無料 但しテキスト代要

※参加自由、初心者歓迎

(問い合わせ先) 出内博都

TEL (〇八四九) 五五〇五三五

備陽史探訪の会
平成四年度総会報告
平成四年二月二三日

平成三年度活動報告

- 二月二四日 総会(於中央公民館)
記念講演「近世瀬戸内地域に於ける土地制度」講師 青野春水先生
参加四六名
- 三月十日 倉敷・岡山ぶらぶら歩き
講師 神谷和孝・佐藤秀子
- 三月一七日 バス例会 戦国小早川氏の城跡を訪ねて
担当 末森清司 参加五三名
- 五月五日 第九回親と子の古墳めぐり 中条一加茂方面
担当 古墳部会 参加六八名
- 六月九日 バス例会 高松城と足守を訪ねて 担当 種本実
参加五六名
- 七月二八日 太平記座談会(於福山城湯殿) 担当 田口・出内・後藤・神谷) 参加四九名
- 九月一日 歴史講演会(於湯殿)
「窪田次郎とその一族」
講師 園尾裕 参加二〇名
- 九月二二・二三日 一泊旅行
(丸亀・善通寺・高松方面)
担当 旅行委員 参加四六名

- 一〇月二〇日 バス例会 神石町の史跡めぐり 担当 出内博都
参加四七名
- 十一月一七日 バス例会 小早川氏の氏寺を訪ねて 担当 堤勝義
参加四二名
- 十二月一日 バス例会 本郷町の古墳めぐり 担当 山口・網本
参加三三名
- 二月一五日 歴史講演会(於ワシントンホテル)「草戸千軒の商い」
担当 下津間康夫 参加三一名
忘年会(於ワシントンホテル)

監査報告書

平成三年度の会計収支に関する帳簿並びに証拠書類の監査を行った結果、会計処理は適正に行われている事を認めます。

平成四年二月二三日
監査委員 藤代由子◎
監査委員 堀エミ子◎

平成三年度
決算報告書

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
繰入金	339,016	通信費	150,754
雑収入	412,440	印刷費	330,527
他売上	22,107	志印費	256,985
利息	7,430	業務費	32,169
雑	70,763	品演費	15,295
		演費	74,490
		諸費	48,785
		期次	30,786
		計	10,000
			23,100
計	851,756	計	135,850

平成四年度活動計画

- 二月二三日 総会・記念講演(於中央公民館)「備後の古墳」
講師 脇坂光彦先生
- 三月二二日 バス例会 矢掛町の史跡めぐり 担当 神谷・田口・山口
- 五月五日 第十回親と子の古墳めぐり及び記念行事(中央公民館)
- 六月一四日 大門町の史跡めぐり(徒歩) 担当 後藤匡史
- 八月二日 座談会 織田信長

平成四年度予算

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
繰入金	135,850	通信費	110,000
雑収入	350,000	印刷費	230,000
	10,000	業務費	25,000
		品演費	40,000
		演費	40,000
		諸費	20,000
		期次	30,850
計	495,850	計	495,850

- 九月六日 バス例会 神石郡三和町の史跡めぐり 担当 馬屋原享・出内博都
- 一〇月一〇・一一日 一泊旅行
西播の史跡を訪ねて
担当 旅行委員
- 十一月一五日 バス例会 秋の古墳めぐり 担当 古墳部会
- 十二月三日 歴史講演会及び忘年会
○郷土史入門講座の開催
- 第十回親と子の古墳めぐり記念行事

備陽史探訪の会

第七期役員

任期H4年2月1日-H6年2月

名誉会長 神谷和孝(歴史研部長兼)

会長 田口義之(任)

副会長 中村勤史

山口哲晶(古墳部会長兼任)

七森義人(事務局局長兼任)

古墳部会副部会長 網本善光

城郭部会長 出内博都

参与 佐藤洋一

中西 晃

梶田英夫

末森清司

後藤匠史

種本 実(新任)

事務局参与 馬屋原亨

会計 佐藤秀子

事務局 井上良三・佐藤錦士

金永真澄

監査委員 藤代由子・堀エミ子

※退任 堤勝義・高橋安子

神石郡油木町の古墳調査

事業報告(委託事業)

(古墳・城郭合同事業)

七月二〇日 予備調査 馬塚他一

三古墳(田口・山口・網本・出

内)

七月二一日 予備調査 松木古墳他

七古墳(田口・山口・網本・出内・

佐藤)

八月六日・八日 調査計画打合せ

(田口・山口・網本・出内)

十一月一日 現地調査(山口・

中村・七森・出内)

十一月二四日 現地調査(山口・網

本・藤井・中村・田中・七森・出

内・現地協力二人(藤野呂古墳・

田中後古墳実測)

二月七・八日 現地調査(田口・

網本・中村・出内……田中後古墳

塚屋・高壺・太鼓ノ丸・塚ンダ・

大坪戸墳)

二月一四日 現地調査(山口・網

本・中村・田中・出内……三秀火塚)

二月二三日 現地調査(山口・中

村・七森・田中・出内……奈良古

墳(大雨中止)

一月一二日 現地調査(山口・網本・

中村・高瀬・七森・田中・出内……

奈良古墳、太鼓ノ丸古墳)

馬塚以下残余のものは三月に行う

予定。※参加希望者は出内

(田五五〇五三五)まで申し出て

下さい。大歓迎します。

中世を読む会

毎月第三金曜日に実施、一〇名前

後の人が参加、今年から現物の写真

版をテキストにした。

一、関東御教書(熊谷文書) 二、

小早川定心讓狀 三、熊谷直経合戦

手負注文 四、足利高氏軍勢催促狀

五、小早川祐景自筆申狀 六、毛利

広房重書案 七、常陸親王令旨

八、平子重房紛失狀 九、小早川本

莊新莊一家連判契約 一〇、毛利豊

元合戦太刀注文 一一、大内政弘下

文 一二、山名持豊書狀 一三、毛

利元就外十一名契狀 一四、小早川

隆景自筆書狀 一五、正親天皇繪旨

一六、吉川一心讓狀 一七、毛利元

就自筆書狀など身近な武家文書をテ

キストにしています。

備陽史探訪の会

古墳・城郭研究部会

平成三年度行事報告

一月 油木町山城実測調査

二月 同 右

四月 親と子の古墳めぐり下調

五月 親と子の古墳めぐり

七月 油木町古墳分布調査

一二月 油木町古墳分布調査

一二月 秋の古墳巡り・油木町古墳

実測調査

平成四年度行事計画案

二月一六日 神辺町要害山城址の測

量調査(実施)

三月 油木町古墳実測調査

四月 親と子の古墳巡り下調査・準

備

五月 親と子の古墳巡り(一〇周年)

十一月 秋の古墳巡り、福山市内の

山城調査

一二月 福山市内の山城調査

その他

①油木町山城・古墳実測調

査のまとめ

②福山市内の古墳の実測調

査(場所は未定)

歴史民俗研究部会

(活動報告)

〇年中行事を学習する

三月一六日(土) 正月から春に

かけての行事について

七月二七日(土) 春から夏にか

けての行事について

〇文化財の見学会

大三島を訪ねる

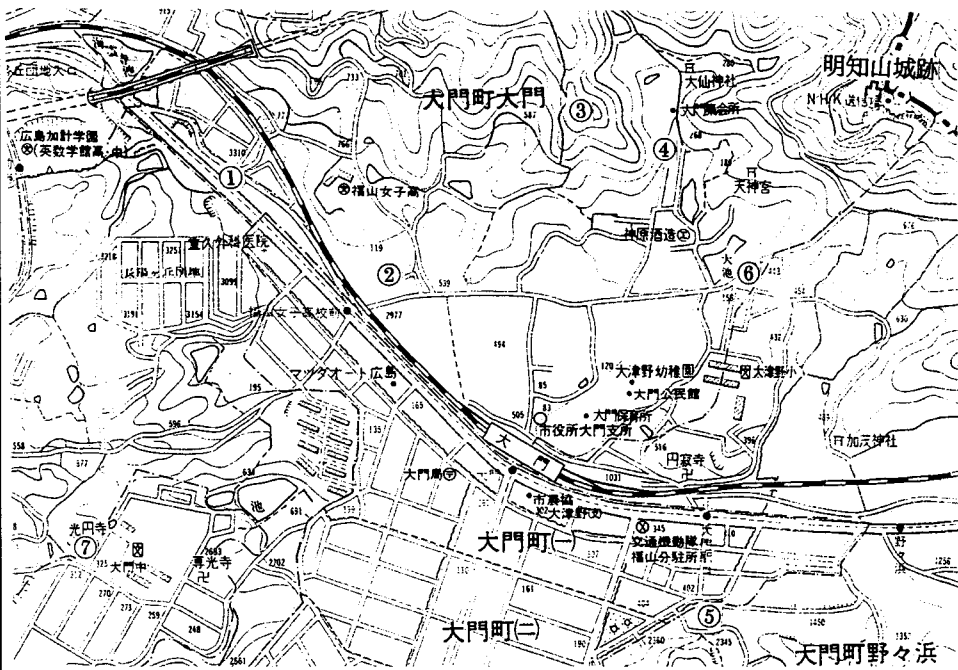
平成四年六月例会予告
六月十四日(日)

大門町の史跡 旧笠岡街道を行く

担当 後藤匡史

大門町随一の史跡、縄文貝塚(前中・後期)を振り出しに西谷四ツ堂のある所、常夜燈の下、道しるべ(右さくみち、左ふちうみち)と書いてあり、旧の旧笠岡街道東へ鳥帽子山八幡社、ここからは昭和五年九月福山女子校々地拡張工事の際併せて同神社が境内を広げる為造成工事中、十二世紀頃の碗や高杯が出土中世祭祀遺跡かと注目された。ここより北に折れ、真明寺枝廣城南山麓、備中大下高田河内守の墓他家臣、又上の坊境内には坪生庄(坪生町)西山城々主神原氏の供養塔、そこから横道四ツ堂、明知山城と続くこの横道以前は通称七隠、日本廻國碑二基 文政・天保年間石ずち山廻國碑又、大門と笠岡の境界道しるべ右さくみち、左福山
昭和三年国道二号線整備拡張の頃までの古道をゆっくり歩いてみませんか。
※詳細は後日ご案内致します。

- ①大門貝塚 福山市史跡
- ②五箇八幡社(枝廣氏寄進の燈ろう)
- ③枝廣城 真明寺高田河内守墓
- ④上の坊 坪生西山城々主神原氏供養塔
- ⑤野々浜四ツ堂 建立年代の確かなお堂
- ⑥明知山城山麓 廻國碑、道しるべ
- ⑦光円寺 境内に元禄年間鶴亀様しきの庭園



大門町の史跡分布図(番号は右掲のもの)

新企画郷土史入門講座

「例会」では少々ものたらないし、
「部会」はともも専門的すぎて：
という方のために今年より新たに
「郷土史入門講座」と題して、平易
な福山地方史の講演会を催します。
原則として毎月第四土曜日の午後、
中央公民館にお集まり下さい。
(但し開催日は講師の都合により変更
がありますので詳細はその都度お
知らせします。

第一回郷土史入門講座

(テーマ) 福山の古墳
(講師) 副会長 山口哲晶
(時) 四月二十九日(みどりの日)
午後一時三〇分～三時
(場所) 中央公民館第三会議室
(会費) 無料
※参加自由、問い合わせは事務局まで

事務局より

☆三月末までに会費未納の方は脱会
されたものとみなします。
☆会報五四号の原稿を募集します。
内容は会や歴史に関するものなら何
でもけっこうです。六月末までにお
寄せ下さい。

備陽史探訪の会三月例会

バスツアー

(岡山県小田郡)

矢掛町の史跡めぐり
募集要項

講師 神谷和孝・田口義之

山口哲晶

期日 平成四年三月二二日(日)

午前八時三〇分 福山駅北
口キャッスルホテル前集合

☆午後五時福山駅着解散予定

会費 会員二八〇〇円

一般三一〇〇円(貸し切り
バス代・入館料等実費)

定員 四五名

申し込み方法 事務局まで電話か

葉書でお申し込みください。
但し、定員に達し次第締め

切ります。

備考 雨天決行、弁当持参、山歩

きの出来る服装で!

主な見学地

旧矢掛本陣石井家住宅

石井家は江戸時代中期以降代々

庄屋を勤めると共に矢掛宿の本

陣職を務めた。現在の建物は江

戸中期から明治初期にかけて建

てられたもので、本陣としては

規模が大きく、建築の質も優れ、
附属物に至るまでよく保存されて
いる。(国重文)

茶臼山城跡

猿掛城主だった毛利元清(元就の

四男)が天正年間隠居城として築

城したもので石組円形井戸など戦

国末期の遺構をよく残している。

現在、町によって文化の森、ヘル

シーロードとして整備されている。

吉備真備公園(ここで昼食です!)

郷土出身の偉人吉備真備を記念し

て作られた公園で真備の巨大な銅

像が建つ。館址亭(休息所)の手

打ちうどんは名物である。

下道氏の墓

元禄二年(一六九九)この付近

より吉備真備の祖母の骨蔵器が発

見され、この地が奈良時代下道一

族の墓地であることが分かった。

その後もこの周辺からは墓誌断片、

納骨器、祭器が発見されている。

(国史跡)

小迫大塚古墳

一辺二三〜二七mの方墳で内部に

全長一〇・七mの両袖式の大形横

穴式石室を持つ。町内最大で下道

一族の墓と推定される。

橋本荒神塚古墳

径二〇mの円墳で、内部に特異な

石棚を持った横穴式石室を有し
ている。
大通寺庭園

当寺は天平一五年(七四三)承

天和尚の開山と伝え、中世には

曹洞宗の寺院として栄えた。

庭園は江戸時代末期の作で石組

中心の池泉鑑賞式庭園として有

名である。

※お問い合わせは

備陽史探訪の会事務局

720 福山市多治米町

五一一九一八

(0849) 53-6157



矢掛町章

事務局日誌

平成三年

十一月二日 事務局会議(四人)

十一月十七日 バス例会 小早川氏

の社めぐり 堤勝義(四人)

十二月一日 バス例会 本郷町の古

墳めぐり 山口・網本氏(三人)

十二月七日 事務局会議 於佐藤秀

子宅(三人)

十二月十五日 歴史講演会・忘年会

「草戸千軒の商い」 下津間康夫

氏 於ワシントンホテル(三人)

平成四年

一月十七日 三役会 於ホーセン

(六人)

一月二十六日 新年会(役員会)

於護国神社参集殿

二月九日 事務局会議 於中央公民

館(三人)

二月二十三日 総会・記念講演会

「備後の古墳」 脇坂光彦先生

(四十人)

備陽史探訪の会事務局

720 福山市多治米町

五一一九一八

(0849) 53-6157